

行した後、引返し、釜山に帰るつもりであった。

しかし、もう日本人は朝鮮には行けない。釜山には行けない。とにかく落ちつき先で待機していてくれとのこと、仕方なく幸崎の里に帰ることにした。一週間以上たったが、なんの音沙汰もないので大分に問合せに出た帰りに、力なく歩いている私に「皆さんお帰りでご安心です」と言う挨拶に、なんのことやらと考えながら家に着くと、妻と娘二人いるではないか。おどろきと、安心と、力がぬけたようであった。さあ、これからの生活、何一つ無い。無から始まる。

関東大震災の年に朝鮮に渡り、南鮮からシベリアに、又京城から北鮮清津にと二十七、八年間外地生活で、あちらで骨を埋めるつもりで生きてきたのだ。先ず住む所を決めねばならない。親族で一人暮らしをしているお婆あさんの所に行くことにした。何年か前に大水害があったそうで、壁は落ち、竹組みだけが残って、ニワトリ小屋のようだった。

食糧は自作せねばならない。桑畑を開墾し、芋を植え、田仕事には、加勢に行くなど、なれない仕事に精

を出した。

それから私は、別府の進駐軍の中で大工の仕事にすることができた。朝は暗いうちに家を出、又暗くなつてから帰るといふ毎日、定年まで働いた。一生懸命だった。

一心同体の再出発

神奈川県 山岸 美恵子

私達一家は、韓国のソウルから引揚げて来ました。

父は朝鮮総督府に奉職しておりましたので、転勤で、平和な生活の中にも何かと忙しいようでした。

私は大正十五年一月、京城で生まれました。そして父の転勤で当然のことですが、朝鮮の各地での生活を味わいました。

女学校時代、三回も転校しました。咸鏡北道清津府、慶尚北道大邱府、最後は京城府でここで府立第一高等女学校を卒業しました。

父は府伊（市長）の仕事で何かと多忙でありましたが、暇を見ては私達兄弟を新任地の名所、旧跡に案内してくれました。

終戦となり、三十八度線がきつぱりひかれました。

京城の街はオモチャ箱をひっくり返したような騒ぎです。

九月某日、かねて婚約中の主人がひょう然と帰ってきました。当時関東軍第五航空師団の前進基地が京城南方水源にあり、そこに勤務しておりましたが、航空隊は警備力がないため、一番早く召集解除となつての帰還です。

この騒ぎの中で、男手のない主人の一家は大きな喜びでした。

十月三日、主人の家で、日本メソヂスト教会牧師の司式で結婚式を挙げることができました。あわただしい中にも恵み豊かな結婚式、式を終えると、私達は帰国の準備にかかり、毎日落ちつかない日々の連続でした。

そして出発の最後の日、私達はリュックサック一つ

を全財産として背負つて長年住み馴れたわが家を追われるようにサヨナラしたのです。

こんな生活が人生にあるのでしょうか。

敗戦をしみじみと感じました。

京城の竜山駅から貨物列車につめ込まれ、三日の後、釜山に着き、引揚船興安丸に乗船することができました。

船腹に緑十字をつけた船の巨体を見たとき、一安心の心境となった。

船は翌日、仙崎の港外に停泊、甲板から箱庭のような仙崎の漁港背後の山々の紅葉は燃えさかっており、その美しさに見入ってしまいました。

私は初めて見た故国日本の美しさ、主人は久方振りに眺めた日本の秋景色、共に日本の自然の美しさに心を満たされました。

昭和二十年十一月十一日、私達は故国の土を踏みこたができたのです。

私達の人生の記念すべき一日となりました。

上陸後、私達は主人の郷里神奈川県秦野に落ちつく

ことになり、親戚の疎開荷物の置場として使われていた納屋を整理して住むことになりました。当時としては、恵まれた住まいであったと思います。

さあ、これから仕事を探して働かねばなりません。周囲の人達、親戚からよいアドバイスがあり、又仕事の話もありましたが、主人はその厚意に感謝しつつも一人立ちの仕事を考えていたようです。

人生サラリーマンとなる勿れ、威勢のよいことばかり考えておりました。引揚げの生活の中でサラリーマンの弱さを知ったのでしょうか。

やすらぎの生活から充実感は生まれない。戦いの中から真に充実感が生まれる。

主人がいつも云う言葉ですが、人一倍健康に恵まれたせいでしょうか。汗流して働くことをいとわない性格のためでしょうか。

私はオロ／＼して迷うこともありましたが、黙々とついていくことしかできません。

生活苦はつきまとして四苦八苦でした。私達にはこれからの十年が引揚者の労苦の生活でした。無我夢中

で働きました。

昭和二十二年六月、丹沢塔の岳に六坪の山小屋を建てて生活が始まりました。昭和二十四年七月小田急の山の家（尊仏小屋）ができあがり、ありがたいことに仕事がスタートしました。漸く仕事の基礎ができたのです。

主人は山頂でただ一人、私は山麓でなれない土地で食糧にもこと欠き、不安な生活、子供のことで精一杯の毎日でした。

いつも十日目毎に山を降りてくる主人が十四日経っても帰宅しないので、不安の思いやる方なく子供を近所の人に預け山に登って行きました。

私の初めての丹沢登山です。山小屋に入ったとき唯一人黙然と働いている主人の姿に感極まりました。

愛情が火花を散らしました。

人生意気を感じては、友の憂いにわれは泣きわが喜びに友は舞う、主人の好きな言葉ですが夫婦の生活でも同じでしょう。終生一心同体で苦楽を共にすべきだと思います。

その日、主人は途中迄見送ってくれました。残る山道の一人歩きを心配しながら山に帰って行きました。

そのころ、神奈川新聞に「わが愛妻物語り」が連載され私達夫婦の生活も取材されました。

丹沢の牽牛織女だとはやされました。こんな生活からか世にいう倦怠期とかも味あわずに済みました。

裸の人生になり裸からのやり直し、私達の選んだ道はこれでよかったですと思っております。

苦難の中に仕事の基礎ができて今日に至っております。

引揚体験記

神奈川県 今井 健 二

明治三十六年、祖父は海外雄飛を志し、朝鮮に渡り仁川の加来商店に入り、将来独立を目ざしていた。

父は結婚後、長男と次男の私だったが、商売の方は朝鮮の農家の副業産物である藁工品の買いつけと、販

売を開始した。日本向け輸出用を一手に引受け、商売の基盤はしだいに固まり、藁工品のあきないは道内全体に手広く進めるにいたった。

又、仁川では一応知名の士のうちに入り、商工會議所の副会頭をしていた。

私は京城帝国大学法学科を卒業後、朝鮮銀行京城本店に就職、昭和十六年北京支店勤務となり、その後、大東亞戦争に突入した。十八年二月結婚し北京において家庭をもった。

十九年二月、現地召集になったので妊娠三か月の妻を北鮮咸興の実家に帰して生活させた。

私は山西省の旅団に入営したが終戦で召集解除となり、中国よりの引揚げ第一船に組み入れられた。

終戦直後は中国と朝鮮は南北共に全然連絡はとれず、実家が何処に引揚げるかもわからず、北鮮の妻と実家はどうなっているかもわからず、特に北鮮はソ連が侵入してきたと云うので一層不安はつるばかりである。

私は中国よりの引揚げ第一船に乗船が決まっていた